片道の青春

ふっとんだ俺の目と脚

サムライ・ヨコウチ
横内仁司

北欧社

片道の青春　ふっとばされた俺の目と脚

定価　五八〇円

著　者　横内仁司
発行者　新保義人
発行所　株式会社　北欧社
東京都中央区湊一―八
電話〇三―五五三―三八三二
印　刷　株式会社　大成美術印刷所
発　行　昭和四十八年七月二十五日
昭和四十八年八月五日第二刷

検印消略

0095―7302―7792

片道の青春

ふっとんだ俺の目と脚

サムライ・ヨコウチ
横内仁司

北欧社

定価580円

北欧社

片道の青春　ふっとばされた俺の目と脚

定価　五八〇円

著　者　横内仁司
発行者　新保義人
発行所　株式会社 北欧社
東京都中央区湊一―八
電話〇三―五五三―三八三二
印　刷　株式会社 大成美術印刷所
発　行　昭和四十八年七月二十五日
昭和四十八年八月五日第二刷

検印消略

0095－7302－7792

片道の青春

ふっとんだ俺の目と脚

横内仁司

北欧社

目次

戦場のスナップ……4
第一章　最初の戦闘……9
第二章　パキスタンからアメリカへの道……43
第三章　まわれ右（アバウト・フェイス）……71
第四章　死はいつでも目の前に……107
第五章　殺られる前に殺れ……159
第六章　血と泥……201
第七章　ふっとばされた片目、片足……241
あとがき……270

第一章　最初の戦闘

1969年 6 月

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

その時俺は、ベトナムへ向かう軍用機の座席に座り、窓から真暗な空を見つめていた。
もう夜中である。高度を高くとっているので、窓から外に見えるのは、黒い闇ばかりだった。
それが、緊張のあまり、押し静まった兵隊たちの心を、よけい重苦しくしていた。
一九六九年の六月。
昨日、この飛行機は、ワシントン州のタコマの空軍基地を出発し、途中、ハワイ、グワムで、一時間ずつ給油のため休んだだけで、飛び続けに飛び、今、トンキン湾の上空から、ベトナムの戦場へ着陸しようとしている。
この軍用の輸送機は、戦場で使われる武器を積み、むき出しの胴体にベンチをつけたような、ガサツなものではない。PAN・AMやNORTH・WESTの普通の旅客機を軍がチャーターしたもので、だれもが海外旅行に使うのと同じ型である。通路の間に、スチュワーデスも往来し、軽いミュージックも流れていた。
この飛行機には百五十人の兵隊が乗っている。
少数の将校と下士官をのぞいたら、後は全部、四カ月の訓練期間を終えたばかりの、新兵だっ

た。俺もその新兵の一人だった。

新兵たちは、アメリカの各州に散らばっている訓練所から寄せ集められ、機械的にセレクトされ、指示を受けて乗りこんだため、お互いに顔見知りもいない。戦場へ近づくという重苦しさから陽気なアメリカ人気質も失われ、だれ一人として友達を作ろうとせず、それぞれ黙りこんで、物想いにふけっていた。

俺たちは、昨日の昼すぎ、タコマの空軍基地を出た瞬間から、皆、アメリカとの縁が、一度切れてしまったのだ。一年間のベトナム従軍を終えるか、大けがをするかしなくては、戻ることができない。中には永遠に帰れない者もいるだろうし、また無傷で帰る者もいるだろう。だがそんなことは、俺にとってはどうでもいいことだ。

なぜなら、そこに自分の死が待っていたとしても、これは俺が選んだ道だからだ。たとえ死であれ、生であれ、俺はただまっすぐ突き進んで行くだけだろう後退(あとずさ)りすることはないだろう。だが俺もできることなら、無傷で帰りたい。

今の世の中には、死はどこにでもある。高速道路で運転していて、死ぬ者もいれば、平和な家庭の二階から落ちて死ぬ者もいる。

このように不意にやってくる死は、人生の哀れさを感じさせる。けれども、向かってくる死に

挑戦して行くのは、たとえそのため死んだからとて、後悔はない。そんな気持で乗りこんだ俺だから、飛行機がベトナムへ近づいた今、緊迫感はあっても、別に恐怖感はなかった。戦争とはどんなものであるか、また、これまでの俺を戦争がどう変えていくかという、一種の変な期待感の方が強かった。

他の者たちの気持は、はっきりは分からないが、多分、皆、ベルト・コンベヤーに乗せられて、屠殺場へ運ばれて行く動物のような気持だったのではなかろうか。

他の兵士と俺と違うところは、俺一人が日本人であるということと、ベトナムの戦場へ行きたくて、進んで乗りこんできたということである。

グアム島から出てベトナムへ近くなるころ、兵士の緊張をときほぐすように、機内に流れる音楽がソフトなものに変わっていったが、着陸も近くなると、その音楽もとぎれ、重苦しくエンジンの音が聞こえるだけだった。

俺が、一九六七年にアメリカへやってきてから、まだ一年と少し、英語もロクに話せない、国籍も日本人のままの、変則的な兵士だった。ただ俺にとっては、今、ベトナムへ向かうということが、絶対に必要な行動だったのだ。いよいよその時が目の前にやってきたのだと、力一杯拳(こぶし)を握りしめていた。

シアトルのタコマ空軍基地を出て五時間目にハワイへ着いたとき、それからまた三時間目にグアム島に着いたときのそれぞれ一時間の休憩時間には、兵士たちは皆争って、外へ出ようとした。少しでも長く地上の平和な空気を吸っておきたかったのだろう。降りるとすぐ、スチュワーデスを間にはさんで、コダック・インスタマチックで、記念撮影をしたりして、はしやぎ回っていたが、やがてベトナムが近いという機上アナウンスがあったとたん、皆、唖のように黙りこくってしまった。

やがて機はベトナム中部の海岸線にある、キャーマンベィ基地の上空で、急角度に降下していった。下りた所は、もう戦場である。青と赤の灯りの列の間をたどりながら、地面を滑走し止った。エンジン音も止まった。

機内の静けさは、異常なほどになった。

今まで愛想よかったスチュワーデスたちも、さすがに固い表情で扉をあけた。

誰も立ち上がる者はいない。

扉はあけられたままだった。

重苦しい沈黙が機内に広まっていた。

この扉こそ、ほとんどの奴にとって、地獄へ向かうゲイトなのだ。

機内アナウンスは

「戦場だから、静かに降りてください」

と告げていたが、すすんで立ち上ろうとする者は、誰もいなかった。暗い扉は開いたままだ。

五分ぐらいして、外から一人の大尉が笑顔で迎えに入ってきた。おそらくこんな情景は、彼にとっては、毎日の当り前のことだったろう。司令部付きの事務職員らしい、平凡なタイプの男だったが兵隊の降しかたには、手馴れたものがあった。

大尉は持ってきた書類を見ながら、名前を一人一人読み上げた。呼ばれた者が返事をすると

「外に出てバスに乗りなさい」

といい、仕方なく、一人一人出ていった。兵士たちの中には、この大尉の人当りのいい笑顔にかえって凄味を感じた者もいただろう。

出がけに扉口に並んだ、四人のスチュワーデスが、それらの青年たちに交互に

「グッド・ラック」

「アイ・ホープ・シー・ユー・アゲイン」

とにこやかに声をかける。それは彼女らの好意にみちた、挨拶であったろうが、言われた方からすれば、あゝこれでシー・ユー・アゲインでなく、二度と会えなくなるのではないか、いよい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com